

無量寿経説法会の比丘衆

柴 田 泰

浄土教思想を示す根本經典である無量寿経は、釈尊が王舎城耆闍崛山中に於いて大比丘衆一万二千人を前にして説法された經典であるとその最初に述べられている。この説法に集まった大衆の代表的人物として、ここでは三十一人の尊者と十八人の菩薩が列記されているが、他の異訳經典ではその数も異なり、また列記される比丘菩薩名にも相違があり、そのすべてを明確にすることはなされていない。諸異本相互の比丘名を完全に明らかにすることは、特に漢訳經典に於いてはその訳出者の意図も働いてくるわけであり、更に諸異本と同一の原本が発見されるか、或いはその原語が規定されない限り不可能ではあるが、現存の梵文に挙げられる比丘名から或る程度は漢訳諸本の訳語は推定出来ると思われる。本稿では、無量寿経説法会の比丘衆について他の諸經典ではどの様に表わされているかを概観し、従来註解せられた諸先師はどの様に理解されていたかを参看し、更に現存の梵文から推定出来る訳語を検討し、従来の諸註解を再検討して、諸異本の特徴並びにその相互関係を可能な限り考えてみようと思う。

〔1〕

無量寿経漢訳諸本では、釈尊説法の際に集まった大衆として次の様に記述している。

無量寿経 魏康僧鎧訳(?)〔以後 (無)と示すこともあり。〕

「与大比丘衆万二千人俱。一切大聖神通已達。其名曰尊者了本際・(以下)正願・正語・大号・仁賢・離垢・名聞・善実・具足・牛王・優楼頻伽*迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・摩訶迦葉・舍利弗・大目犍連・劫賓那・大住・大淨志・摩訶周那・滿願子・離障閼*・流灌・堅伏・面王・果*乘・仁性・喜*樂・善来・羅云・阿難。皆如斯等上首者也。……(以下 十八菩薩名列記)」²⁾

無量清浄平等覚経 後漢支婁迦讖訳(?)〔以後 平等覚経 (平)〕

「与大弟子衆千二百五十人。菩薩七十二那術。比丘尼五百人。清信士七千人。清信女五百人。欲天子八十万。色天子七十万。遍浄天子六十那術。梵天一億。皆随仏住。神通飛化弟子。名曰知本際賢者・(以下)馬師・大力・安詳・能讚*・滿願臂・無塵・氏聚迦葉・牛伺・上時迦葉・治恒迦葉・金杵*坦*迦葉・舍利弗・大目犍連・大迦葉・大迦旃延・多睡・大買師・大瘦短・盈弁了*・不爭有無・知宿命・了深定・善来・離越・癡王・氏戒聚・類親・氏梵経・多欲・王宮生・告*来・氏黑山・経*刹利・博聞。……(以下 比丘尼十人・長者十六人・清信女七人の名前を挙げる。)」³⁾

阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経 呉支謙訳〔以後 大阿経 (大)〕

「有摩訶比丘僧万二千人。……賢者拘隣・(以下)拔智致・摩訶那弥・合戸*・須満日・維末抵・不迺*・迦为拔抵・憂为迦葉・那履迦葉・那翼迦葉・舍利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶揭質・摩訶拘私・摩訶梵提・弥提文陀弗・阿難律・難提・臃脾抵・須楓・蠶*越・摩訶羅倪・摩訶波羅延・波鳩蠶*・難持*・滿楓蠶*・蔡揭・厲越。如是諸比丘僧甚衆多。」⁴⁾

大宝積経無量寿如来会 唐菩提流志訳〔以後 如来会 (如)〕

「与大比丘衆万二千人俱。……其名曰尊者阿若憍陳如・馬勝・大名・有賢・無垢・須跋陀羅・善称・円満・憍梵鉢提・優楼頻伽迦葉・那提迦葉・伽耶迦葉・摩訶迦葉・舍利弗・大目犍連・摩訶迦旃延・摩訶劫賓那・摩訶注那・滿慈子・阿尼楼駄・離波多・上首王*・住彼岸・摩俱羅・難

陀・有光・善来・羅喉羅・阿難陀等・而為以首。……（以下 十四菩薩名を列記）」⁵⁾

大乘無量寿莊嚴經 宋法賢訳〔以後 莊嚴經（莊）〕

「与大苾芻衆三万二千人俱。……其名曰尊者阿若憍陳如・（以下）馬勝・麼瑟比拏・大名・跋多婆・称天・離垢・妙臂・布闍拏枳曇・憍梵波提・優楼頻螺迦葉・那提迦葉・舍利子・大目乾連・摩訶迦旃延・摩訶俱絺羅・劫賓那・摩訶鞠那・弥多羅尼子・阿那律・喜・緊鼻哩拏・須菩提・哩嚩帝・佉囉囉囉囉*枳曇・摩訶囉倪・波羅野尼枳曇・嚩拘隸曇・阿難陀・羅喉羅・善来。如是等三万二千人俱。」⁶⁾

以上の記述を整理すると、無量寿経では説法会衆の比丘数は一万二千人、その中代表的人物として比丘三十一人、菩薩十八人を挙げる。平等覚経では、大弟子一千二百五十人、菩薩七十二那術、比丘尼五百人、清信士七千人、清信女五百人、欲天子八十万、色天子七十万、遍浄天子六十那術、梵天一億として、比丘三十六人、比丘尼十人、長者十六人、清信女七人の名を挙げ、他の諸本とは記述形態・内容を別にしてある。大阿経では大比丘僧一万二千人とし、比丘三十一人を挙げるが菩薩名は無い。如来会は大比丘衆一万二千人として、比丘二十九人、菩薩十四人を挙げる。莊嚴経は大苾芻衆三万二千人とし、比丘三十一人の名を挙げるが、菩薩名は記述されていない。従って、比丘数については無量寿経・大阿経・如来会は一万二千人と一致し、菩薩名については無量寿経・如来会のみが挙げられている⁷⁾。平等覚経は人数・列記比丘名とも他の諸本とは全く異なった記述形態であり、他に根拠を求めるべきものと思われる。莊嚴経の三万二千人は後述する梵蔵本の比丘数と一致している。

〔2〕

無量寿経漢訳諸本に於いて以上の様に列記される説法会衆としての比丘たちは、いずれも著名な比丘たちであり、各諸本の訳出された当時の最も尊敬され知られていた人々であることを示していると思われるが、それでは他の經典に於いてはどの様に記述され、そこにはどのような系統が考えられているのか、そして無量寿経の記述は其中でどの範疇に属するのか、ここで特に漢訳經典に表われる説法会衆としての比丘たちについての記述を取り上げてみよう。

經典が説かれる場合、通常六成就が述べられ、この中の衆成就に表われる比丘衆・菩薩衆はほぼ定型化されていると考えられているが、その記述の順序については必ずしも同じと云うわけではない様である。無量寿経の記述順序について澤興は「無量寿経連義述文贊」の中で次の様に述べている。

諸経の列衆には定まった次第と云うものは無い。或るものは行徳の大小によって順序とし、法華経がそうである。或るものは出家の前後によって順序とし、報恩経・此経（無量寿経）がそうである。また或るものは徳弁の勝れたものを順序としているが無垢称〔経〕の如きがそうである⁸⁾。

この分類によると 1. 行徳次第、2. 出家次第、3. 徳弁次第 の三つに分けられているが、2. 出家次第は本稿の無量寿経がそうであるから⁹⁾、行徳次第・徳弁次第の例として挙げられる法華経、無垢称経の記述を取り上げてみる。

妙法蓮華経 鳩摩羅什訳

「阿若憍陳如・摩訶迦葉・優楼頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連・摩訶迦旃延・阿菟楼駄・劫賓那・憍梵波提・離波多・畢陵伽婆蹉・薄拘羅・摩訶拘絺羅・難陀・孫陀羅難

陀・富楼那弥多羅尼子・須菩提・阿難・羅睺羅。」¹⁰⁾

説無垢称経 玄奘訳

「舍利子・大目犍連・迦葉波・大善現・滿慈子・摩訶迦多衍那・大無滅・優波離・羅怛羅・阿難陀。」¹¹⁾

この二経のうち、説無垢称経は、維摩居士の病いを慰問することを仏陀が声聞・菩薩に命じるのであるが、いずれもかって居士の為に難詰されたことを述べて慰問を辞退することを説く〔弟子品・菩薩品〕、ところに表われるのであるが、この箇所は仏陀の「十大弟子」の依拠とされている程有名な記述である。しかし、仏陀の十大弟子は諸比丘の中でも經典では最も多く表われる比丘たちであり、また、衆成就として述べられているわけでもないし、行徳次第と徳弁次第とでは記述順序としてはそれ程大きな違いがあるとも思われないので、ここでは一つの独立した系統とせず、出家次第とは異った系統として行徳次第に含めて考えても良いと思われる。

この様に出家次第と行徳次第とに大きく分けて諸經典の衆成就としての比丘衆記述をみてみよう。先ず、初転法輪の五比丘から記述される為に出家次第と思われる經典のうち、主なものを挙げてみる。

大宝積経三律儀会 菩提流志訳

「阿若憍陳如・阿濕婆氏多・摩史波・摩訶男・優陀夷・耶舎・富那・無垢・善臂・憍梵鉢提・優樓頻螺迦葉・那提迦葉・摩訶迦葉・舎利弗・大目乾連・阿那律・須菩提・離波多・富楼那弥多羅尼子・優波離・羅睺羅、難陀。」¹²⁾

弥勒菩薩所問本願経 竺法護訳

「了本際・馬師・嚳波・大称・賢善・離垢・具足・牛伺・鹿吉祥・優為迦葉・那翼迦葉・迦翼迦葉・大迦葉・所説・所著・面王・難提・和難・羅云・阿難。」¹³⁾

金光明最勝王経 義浄訳¹⁴⁾

無上依経 真諦訳¹⁵⁾

大乘本生心地観経 般若訳¹⁶⁾

等がそうである。

行徳次第の經典としては、浄土三部経の一つである阿弥陀経等が挙げられる。

阿弥陀経 鳩摩羅什訳

「舎利弗・摩訶目乾連・摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶拘絺羅・離婆多・周利槃陀迦・難陀・阿難陀・羅睺羅・憍梵波提・賓頭盧頗羅墮・迦留陀夷・摩迦劫賓那・薄俱羅・阿菟楼駄。」¹⁷⁾

一字仏頂輪王経 菩提流志訳

「舎利弗・迦葉波・那提迦葉・伽耶迦葉・大迦葉波・大目乾連・滿慈子・孫跋難陀・瑠波難陀・跋地利迦・阿泥楼駄・迦旃延子・摩訶俱都羅・憍梵波提・大憍梵波提・孫那羅・大孫那羅・善現・憍陳如・制底君惹羅・羅睺羅・慶喜。」¹⁸⁾

大宝積経菩薩見実会 那連提耶舎訳¹⁹⁾

〃 無畏徳菩薩会 仏陀扇多訳²⁰⁾

〃 無垢施菩薩応弁会 聶道真訳²¹⁾

〃 文殊説般若会 曼陀羅仙訳²²⁾

〃 広博仙人会 菩提流志訳²³⁾

大方広如来蔵経 不空訳²⁴⁾

陀羅尼集経 阿地瞿多訳²⁵⁾

大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰一切呪王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧呪品²⁶⁾

一字奇特仏頂經 不空訳²⁷⁾

守護大千国土經 施設訳²⁸⁾

請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經 竺難提訳²⁹⁾

最上大乗金剛大教宝王經 法天訳³⁰⁾

延寿妙門陀羅尼經 法賢訳³¹⁾

等が考えられる。

しかしながら、環興に指摘されている様に出家次第、行徳次第は明確に定められた二系統と云うのではなく、初転法輪の五比丘の中で最初の悟道者とされる憍陳如を挙げながら、他の四人は述べず、続いて舍利弗、目連等行徳の秀れた比丘を記述する大宝積経勸授長者会、弥勒菩薩所問会、僧伽吒経、千仏因縁経、文殊師利問経等³²⁾の両系統に属する經典も多くみられる。衆成就記述の典型として挙げられている法華経の列記も環興に依れば、行徳の大小による順序とされているが、梵本には五比丘がすべて述べられており、続いて摩訶迦葉、三迦葉、舍利弗、大目犍連……と記されている点は無量寿経と類似しているから、出家次第の系統にも属しているとも云えよう。

これらの記述を便宜上大正新脩大藏経の分類から概観してみると、阿含經典ではこれらの比丘たちは主要な役割を持って登場してくるのであり、衆成就と考えられる様な形態にはなっていない。本縁部に収められる經典では仏陀の説法教化が説かれる仏伝經典において個々の比丘についての事蹟が詳しく記されているが、説法会衆として經典の首に列記するものは方广大莊嚴経、大乘本生心地経、大方便仏報恩経ぐらいであろう。般若・華嚴經典では、衆成就として菩薩衆が多く、經典にそれも多数列記され、諸天・諸神等も表わされるが、声聞比丘衆の記述はみられない。これは深遠ではあるが、それ故に難解でもある大乘仏教の般若 (prajñā) の思想、法界縁起・無尽縁起を説く華嚴思想の聞法者としては菩薩衆こそそれに値いするのであり、声聞比丘の具体的な列記はなされなかったと考えられる。説法会衆として比丘名が比較的多く記述されるのはすでに例として挙げた大宝積経であり、出家次第・行徳次第、そのどちらとも考えられるものとすべてに涉っており、同本異訳經典においてもその違いが表われている。思想的には同系統の分野として収められない経集部經典では菩薩名のみ列記が多くみられるが、比丘名が記述されている經典も多少みられる。仏教の中では比較的後期に属する密教經典では、衆成就として具体的に比丘、菩薩、諸天等を記す經典は他部に較べて多いが、比丘衆列記については行徳次第に属するものばかりで出家次第の經典は無い様である。全体的傾向としては、どんな經典にもほぼ定型化されて表われていると考えられている説法会衆としての比丘名列記は必ずしもそうではなく、またその数が二十名を超えて記される經典は決して多くは無い。出家次第、行徳次第と云う二つの系統について云えば、同本異訳經典でも両方の立場に分かれているものもあり、その発生に於いて全く質を異にしていたとは云えない。むしろ、本来は經典が成立する当初に最も仏陀に身近い人々と考えられ、現実性を帯びて知られていた初転法輪の五比丘から述べられていた比丘たちがだんだんと時代を経るに従ってその実在性が遠のき、逆に經典に説かれる行状、事蹟等の多いより秀れた舍利弗、目連、大迦葉等の印象が大きくなり、また經典で説かれる思想内容にも影響を受けて、やがて行徳次第と云われる様な順序が表われてきた³³⁾と考えるのも良いであろう³⁴⁾。

〔3〕

さて、無量寿経に述べられている比丘衆名についての諸先師の註解であるが、いずれも魏訳(?)

無量寿経に基づくものであり、特に日本に入り、浄土宗の開祖法然上人によって浄土三部経が根本經典とされてからは、それ以後の浄土教各宗の註解は枚挙にいとまもない程になっている。これらはいずれも魏訳無量寿経の註解ではあったが、諸異本の比丘衆名を参看しているものもありここでは代表的註解とされているものの中から、特に諸異本についても述べているものに重点をおいて従来の諸先師がどのように解釈されていたかを検討してみたい³⁵⁾。

まず、無量寿経註釈書として最初のものであり、その後の諸註解には必ず引用される浄影寺慧遠の無量寿経義疏には「了本際とは姓が憍陳如、阿若が字である。阿は無と訳し、若は智と訳す……。餘のものは經典の中に曾って聞いたものもあるし、聞かないものもある。」として、他の比丘名については触れていない。それ故各比丘名について註釈した最初の人(嘉祥大師吉蔵)ということになるが、それ以後の諸註解との重複を避ける為と、後に比丘名が或るグループをとっていると考えられてくる為に、グループごとに分けて検討を進めることにしたい。これから述べる諸註解については諸異本と比較をした箇所のみを取り上げるが、吉蔵については後の註釈家がすべて引用する解釈であるので参考までに記述する。

初転法輪の五比丘——了本際・正願・正語・大号・仁賢

吉蔵は了本際を「亦称 阿若憍陳如」と指摘したあとで、初転法輪で最初に悟道した五比丘として「一名陳如。二阿葉鞞。三訶男。四波提。五波敷。」を挙げているが「ここでは但陳如一人を出している。」と以下の比丘名を初転法輪の四人には当てていない。四人については、

正願者本期出家得道故名正願 正語口無四過故 大号美名避布 仁賢徳性軟和故と説明する。従って異本比丘名については触れておらず、この点について最初に問題にしているのは現存の註釈書では環興の連義述文贊である³⁶⁾。彼は、

了本際は(大)拘隣、正願は(大)拔智致で拔提、正語は(大)摩訶那弥・(平)能讚、大号は離波多、仁賢は(大)須満曰。

とする。性海は仏本行集経との関係を指摘して、

(無)	(平)	(大)	(如)	(莊)	本行集——義寂疏
了本際——	知本際——	拘隣	——阿若憍陳如——	阿若憍陳如——	憍陳如
正願——	馬師	欠	——馬勝	——馬勝	——五阿奢輪時
正語——	三大力	欠	——欠	——摩瑟比拏	——三婆沙婆
大号——	五能讚	——三摩訶那弥——	大名	——大名	——四摩訶那弥
仁賢——	四安祥	——三拔智致	——有賢	——跋多婆	——二跋提梨迦

と説き、峻諦も同様に五比丘に配している。道穩は、

義寂・環興は五比丘に配しているが、正願・正語の二人は未詳であり、強いて五比丘に配すべきでない。大号は(如)(莊)大名・(大)摩訶那弥、仁賢は(如)有賢。

と確実に相応出来るものだけを述べている。白弁は、

了本際は(大)拘隣・(如)(莊)阿若憍陳如、正願は(平)馬師・(如)(莊)馬勝・、正語は諸先師の所説を引用するのみ、大号は(大)摩訶那弥・(平)大力・(如)(莊)大名、仁賢は(莊)跋多婆。

とする。深励・法海は仏本行集経を依り所として、

了本際は阿若憍陳如、正願は(如)(莊)馬勝、正語は十力迦葉、大号は(莊)大名、仁賢は跋提。と指摘する。

これらの諸説をみると、いずれも釈尊初転法輪の五比丘と指摘されているが、環興の「正願は拔提、大号は離波多。」という説は後の註解家には否定されている。五比丘の中では正願・正語の

二人を如何に異本と相応させるかに考慮が払われ、不確實故に触れない態度と前後の比丘名を規定することによって五比丘のいずれかに当てる態度の二つがうかがわれる。個々の検討は梵本比丘名との比較の際に行なうことにする。

耶舎とその友人——離垢・名聞・善実・具足・牛王

吉蔵が、

離垢離破戒之垢 名聞多人所知 善実従内徳 具足従受戒 牛王従昔因縁 ……両処似牛故

と註釈する次の五人の比丘については、仏本行集経の所説と関連させて耶舎とその四人の友人と考えられている。釋興は、

離垢は(大)維末抵

とだけで異本には触れていない。性海は初転法輪の五比丘の対照と同じ様に仏本行集経・四分律の所説と対比させて、

(無)	(平)	(大)	(如)	(莊)	本行集	四分律
離垢	ニ無塵	ニ維末抵	一無垢	ニ離垢	毘摩羅	無垢
名聞	一欠	一含尸?	ニ善称	一称天	耶輸陀	耶輸伽
善実	一滿願臂	ニ須滿目?	ニ須跋陀羅	ニ妙臂	脩婆侯	善臂
具足	一欠	四須滿目	四円滿	四布蘭拏枳曩	富蘭那迦	滿願
牛王	四牛同	五迦為拔坻	五憍梵鉢提	五憍梵波提	伽婆跋帝	伽梵波提

と相応させる。峻諦・道穩・白弁・深勵・法海も同じ様に仏本行集経によって対比解釈しているので、性海において不確定な平等覚経・大阿経の箇所について述べるものを挙げると、道穩は、

(平)滿願臂は二人を合せて一人としたものである。

白弁は

名聞との相応は平等覚経・大阿経では知り難い。また、善実・具足についても同様である。

と規定していない。

従って、離垢・牛王についての対比は諸本とも問題は無く、平等覚経・大阿経の他の三人の比丘については対比されていない。耶舎とその四人の友人については無量寿経・如来会・莊嚴経の三本はすべて相応が可能な様である。

三迦葉——優樓頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉

吉蔵が、

此三人従処標名 (優樓頻螺) 此従木瓜 伽耶城名 那提水

と述べる三迦葉については、如来会とは順序が逆だけで問題なく相応する。平等覚経・大阿経との対比は難しいのであるが、諸註解で異本に触れているのは性海・白弁のみである。性海は、優樓頻鬘迦葉は(平)上時迦葉・(大)憂為迦葉、伽耶迦葉は平等覚経・大阿経には欠けている。平等覚経の氏聚・金杵坦迦葉、大阿経の那履・那翼迦葉については末だ何になるか判らない。那提迦葉は(平)治恒迦葉と一致する。

と述べている。白弁は、

大阿経では憂為・那履・那翼迦葉が三迦葉に当り、平等覚経では上時・治恒・金杵坦迦等に当る。

とするが、どれがどれに当るかまでは述べていない。

四聖徒——摩訶迦葉・舍利弗・大目犍連・劫賓那

吉蔵が、

舍利弗此名身子……………目連亦是姓字拘律陀……從拘律陀樹 求得此兒也

と釈す舍利弗・目連については他の比丘に較べて詳しく註釈しているが、摩訶迦葉・劫賓那については義釈していない。この中、劫賓那を除いた三人については、著名中の著名な仏弟子であり白弁に「亦脱略か。」と指摘される莊嚴經に摩訶迦葉の名前が無い外は諸本すべてに容易に対比出来る比丘であり、その列記順序の相違以外には問題は無い。劫賓那については如来会・莊嚴經には見出せるが、平等覺經・大阿經には不明である。註解では性海が「(大)摩訶揭質」を挙げるのみである。

以下の比丘名——

さて、上に述べた初転法輪の五比丘・耶舎とその友人・三迦葉・四聖徒については、いずれも高名な比丘達であり、諸註解でも比較的詳細に述べられ、また異本も参看しているが、以下の十四人の比丘については諸先師の見解はまちまちである。

先ず、吉蔵の解釈であるが、

静志從内定 周那言離香 滿願是富樓那 離障那律 … 羅云是羅睺羅此云覆障 阿難此言無染とすべての比丘について述べてはいない。環興は、

大住は迦旃延、周那は周利般特、滿願子は滿慈子・富樓那弥多羅尼子、離障は阿泥律陀、流灌は孫達羅難陀のことで(大)難提、堅伏は(平)了深定、面王は(大)波鳩螺、異乗は(平)氏戒聚、喜樂は難陀・(大)難持、善來は(大)蔡揭、羅云は(平)王宮生、阿難は(平)博聞。

性海は、

大住は異本すべてにある大迦旃延、大淨志は(大)摩訶拘私・(如)摩俱羅・(莊)摩訶拘絺羅、周那は(如)注那・(莊)鞠那、滿願子は(平)盈弁子・(大)邠提文陀弗・(如)滿慈子・(莊)弥多羅尼子、離障は(平)多睡・(大)阿難律・(如)阿尼樓駄・(莊)阿那律、流灌は(平)多欲・(大)難提・(如)難陀・(莊)喜、堅伏は環興の説は未穩として(平)離越・(大)厲越・(如)離波多・(莊)哩嚩帝、面王は環興の説の通り、異乗は(大)摩訶波羅延・(如)彼岸・(莊)波囉野尼枳曩、仁性は(平)仁吉・(如)上首或いは有光・(莊)佉囉囉嚩囉枳曩、羅云は(平)王宮生・(大)螺越、阿難は(平)博聞。

峻諦は、

大住等については、經典の中で検べても未だ判明しない。暫らく古師に依ってその人を定めよう。

と私見は述べていない。白弁は、

大住は環興の説が正しい。大淨志は何人か定め難い。周那は(莊)鞠那・(如)注那、滿願子は、如来会・莊嚴經にはあるが、大阿經・平等覺經では判らない。離障は(平)多睡・(莊)阿那律・(如)阿泥樓駄、流灌は(平)多欲?・(大)離提・(莊)喜・(如)摩俱羅難陀(如来会の比丘名では二人を一人と考えている。)、堅伏は離提・難陀の次に云うから、(大)嚩脾抵・(莊)緊鼻哩孃、面王は環興の説は知り難いし、異乗も再検討する必要がある。

とあり、以下の比丘名については諸説の引用のみで私見を述べてはいない。深励は、

大住については環興の云う迦旃延は誤りであり、(大)拘私・(莊)俱絺羅、大淨志は(大)梵提、離障は(大)阿難律・(如)阿泥樓駄、流灌は孫達羅難陀であるから(大)難提、異乗は(大)波羅衍・(如)彼岸、仁性は(莊)須菩提・(平)仁吉、喜樂は(大)難陀。

とする。法海もほぼ同じ見解である。

これらの諸説をみると、満願子・離障の二人については一致しているが、他の比丘名については見解が異なっている。これは前の十七人の比丘名の場合の仏本行集経に相当する様な経典が無いことにもよるが、無量寿経を中心として何とかそれに合わせようとすることからくる無理が原因であり、また、梵本が無い為にその梵語が判らないことにもよっている。漢訳者は経典の翻訳に際して必ずしも正しい訳語を用いているわけでは無いが、次項以下では現存梵本の比丘名から漢訳諸本の比丘名とその変化・移行を考えてみる。

〔4〕

前に取り上げた漢訳無量寿経諸本比丘名の相違について、次にその梵語からの推定をする為に梵本無量寿経の比丘名を取り上げてみる。無量寿経の梵本については、従来、荻原雲来博士のオックスフォード改訂本³⁷⁾〔荻原本, **Wogihara** 本〕が用いられていたが、近年、足利惇氏博士によって榎亮三郎博士将来本の刊行³⁸⁾〔足利本, **Ashikaga** 本〕がなされたので、これを底本として考えてみたい。

足利本では釈尊の無量寿経説法に集まった長老大声聞として次の三十五人を挙げている³⁹⁾。

パーリ語

1	Ājñātakauṇḍīnya	Aññāta-koṇḍañña or-aññā
2	Aśvajit	Assaji
3	Bāṣpa (Wogihara 本 Vāṣpa)	Vappa
4	Mahānāman	Mahānāma
5	Bhadrajit	Bhaddiya
6	Yaśodeva	Yasa
7	Vimala	Vimala
8	Subāhu	Subāhu
9	Pūrṇa-maitrāyaṇīputra	Puṇṇa-mantānīputta
10	Gavāmpati (Wogihara 本欠)	Gavampati
11	Uruvilvākāśyapa	Uruvelakassapa
12	Nadīkāśyapa	Nadīkassapa
13	Bhadrakāśyapa (Ashikaga 本) Gayākāśyapa (Wogihara 本)	Gayākassapa
14	Kumārakāśyapa	Kumārakassapa
15	Mahākāśyapa	Mahākassapa
16	Śāriputra	Sāriputta
17	Mahāmaudgalyāyana	Mahāmoggallāna
*	Mahākaṣṭhīlya (Wogihara 本挿入)	Mahākoṭṭhīya,-ika,
18	Mahākapphina (Wogihara 本 Mahākaphila)	Mahākappina
19	Mahācunda	Mahācunda
20	Aniruddha	Anuruddha
21	Rādha (Wogihara 本欠)	Rādha
22	Nandika	Nandiya

23 Kimpila		Kimbila, Kimila, Kimmila,
24 Subhūti		Subhūti
25 Revata		Revata
26 Khadiravanika		Khadiravaniya
27 Vakkula (Woghara 本 Vakula)		Vakkula, Bākula, Bakkula
28 Svāgata		Sāgata
29 Amogharāja		
30 Pārāyaṇika		Pārāpariya
31 Pantha (Woghara 本 Patka 註4で Panthaka)		Panthaka
32 Cūlapantha (Woghara 本 Cullapatka 註4で-panthaka)		Cūlapanthaka
33 Nanda		Nanda
34 Rāhula		Rāhula
35 Ānanda		Ānanda

〔5〕

さて、上の様に列記される梵本比丘名から無量寿経漢訳諸本の比丘名を検討し、従来の諸先師の見解を再検討しようと思うが、その比較を容易ならしめる為に対照表を挙げると次の通りである。

無量寿経比丘名対照表⁴⁰⁾

Skt.	莊嚴經	如来会	無量寿経	大阿経	平等覚経
Ājñātakaunḍinya	— 阿若憍陳如 —	— 阿若憍陳如 —	— 了本際 —	— 拘隣 —	— 知本際 —
Aśvajit	— 馬勝 —	— 馬勝 —	— 正願 —	— 拔智致 —	— 馬師 —
Vāṣpa	— 麼瑟比拏 —	— 欠 —	— 正語 —	— —	— —
Mahānāman	— 大名 —	— 大名 —	— 大号 —	— 摩訶那弥 —	— 大力 —
Bhadrajit	— 跋多婆 —	— 有賢 —	— 仁賢 —	— 合戸 —	— 安詳 —
Yaśodeva	— 称天 —	— 無垢 —	— 離垢 —	— 須滿日 —	— 能讚 —
Vimala	— 離垢 —	— 須跋陀羅 —	— 名聞 —	— 維末抵 —	— —
Subāhu	— 妙臂 —	— 善称 —	— 善実 —	— (須滿日) —	— —
Pūrṇa-maitrāyaṇī-putra	— 布闍拏枳曇 —	— 円滿 —	— 具足 —	— 不廻 —	— 滿願臂 — — 氏聚迦葉 —
Gavāṇpati	— 憍梵波提 —	— 憍梵鉢提 —	— 牛王 —	— 迦為拔抵 —	— 牛伺 —
Uruvilvā-kāśyapa	— 優楼頻螺迦葉 —	— 優楼頻鬘迦葉 —	— 優楼頻鬘迦葉 —	— 憂為迦葉 —	— 上時迦葉 —

Nadīkāśyapa — 那提迦葉 — 那提迦葉 ~~X~~ 伽耶迦葉 } (那履迦葉) (治恒迦葉)
 Gayākāśyapa — 欠 — 伽耶迦葉 ~~X~~ 那提迦葉 } (那翼迦葉) (金杵坦迦葉)

Bhadrakāśyapa

Kumārakāśyapa

Mahākaśyapa — 欠 — 摩訶迦葉 — 摩訶迦葉 ~~X~~ 舍利弗 — 舍利弗

Śāriputra — 舍利子 — 舍利弗 — 舍利弗 ~~X~~ 摩訶目犍連 — 大目犍連

Mahāmaud-
galyāyana — 大目犍連 — 大目犍連 — 大目犍連 ~~X~~ 摩訶迦葉 — 大迦葉

摩訶迦旃延 — 摩訶迦旃延 — (大住) — 摩訶迦旃延 — 大迦旃延

Mahākauṣṭhilya — 摩訶俱絺羅 — 欠 — (大淨志) 摩訶揭質 ~~X~~ 多睡

Mahākapphina — 劫賓那 — 摩訶劫賓那 — 劫賓那 ~~X~~ 摩訶拘私 ~~X~~ 大賈師

大住
大淨志

Mahācunda — 摩訶瞿那 — 摩訶注那 — 摩訶周那 — 摩訶梵提? —
 弥多羅尼子 — 滿慈子 — 滿願子 — 邠提文陀弗 — 大瘦短
 盈弁子

Aniruddha — 阿那律 — 阿尼樓駄 — 離障 — 阿難律 — 不爭有無

Rādha

Nandika — 喜 — 欠 — 流灌 — 難提 知宿命

Kimpila — 緊鼻哩拏 — 欠 — 堅伏 — 臃脾抵 了深定

Subhūti — 須菩提 — 欠 — — 須楓 — 善來

Revata — 哩嚩帝 — 離波多 — — 蠶越 — 離越

Khadiravanika — 佉禰囉嚩僂枳曩 — 欠

LV.

Vakkula Amogharāja — 摩賀囉倪 — 上首王 — 面王 — 摩訶羅倪 — 癡王

Svāgata Mahāpāranika — 波羅野尼枳曩 — 住彼岸 — 異乘 — 摩訶波羅延 — 氏戒家

Amogarāja Vakkula — 嚩拘隸曩 — 摩俱羅 — 仁性 — 波鳩蠶 — 類親

Pārāyaṇika Nanda — 阿難陀 — 難陀 — 喜樂 — 難持 — 氏梵經
 多欲

Pantha

Cūlapantha

有光

Nanda Rāhula — 羅睺羅 ~~X~~ 善來 — 善來 ~~X~~ 滿楓蠶 — 王宮生

Rāhula Svāgata — 善來 ~~X~~ 羅睺羅 — 羅云 ~~X~~ 蔡揭 — 吉來
 氏黑山
 經利利

Ānanda Ānanda — (阿難陀) — 阿難陀 — 阿難 — 博聞
 厲越

※比丘名は経典記述通りに示す、それ故前後より明らかに順序が逆になっているものは線によって指示した。ずらした比丘名は判断出来ないもの。()内の比丘名は順序も異なり不確定ではあるが、註解梵名等より推定出来ると思われるもの。欠は明らかに欠けている比丘名である。

先ず、最初に述べられる *Ājñātakaṇḍinya* であるが、この人は五比丘の中でも第一に悟った比丘として阿若(多)憍陳如と音訳されていることは非常に多くの経典に表われており⁴¹⁾、仏伝として特に有名であり、諸先師も依用する仏本行集経には、

世尊が初めて五比丘に説法したときに 憍陳如が一番先に悟りその因縁によって證智と名づけられた⁴²⁾。

とあり、蔵本無量寿経でも“すべてを知れる *kun-śes* 憍陳如⁴³⁾”となっているから、*Ājñāta* を名前としてではなく形容詞として考えても良いわけである。(無)了本際・(平)知本際⁴⁴⁾は従来(真理の究極である本際を)知了したるもの *Ājñāta* と解釈されているが、原語から考えれば、本来は *Kaṇḍinya* の語が訳されねばならず、必ずしも良い意識語とは云えない。これは、火器或いは *Kuṇḍina* 族のものとして訳されている *Kaṇḍinya* に本際と意識されるべき意味があったのではなかろうかと思われるが、現在の梵語辞典からは規定出来ない。^補(大)拘隣と云う音訳語は、

尊者拘隣若(中阿含侍者経)⁴⁵⁾

阿若俱隣(雜阿含)⁴⁶⁾

初化拘隣真弟子。我声聞中第一比丘。……所謂阿若拘隣比丘是。初受法味 思惟四諦 亦是阿若拘隣比丘。(増一阿含)⁴⁷⁾

是故敷演十二縁起 而轉法輪。 拘隣知之。 拘隣者知本際也・化彼五人拘隣之等。(普曜経)⁴⁸⁾

拘隣(中本起経)⁴⁹⁾

阿若拘隣(如来莊嚴智慧光明入一切仏境界経)⁵⁰⁾

と他に類似の用例もあるから、諸本とも比丘衆列記の第一番目の比丘名は *Ājñātakaṇḍinya* である。諸註解について云えば、いずれも正しい相応をしているが、阿と云うのは無と訳す^ミと説く慧遠の見解をすべて踏襲しているのは *Ājñāta* の *ā-* を否定辞 *a-* と考えていたわけで誤りである。この *Ājñātakaṇḍinya* を含めた *Aśvajit*, *Vāṣpa*, *Mahānāman*, *Bhadrajit* の五人を諸先師は釈尊初転法輪の五比丘と考えて今日に至っているが、その典拠はすべて仏本行集経によっている。この経典は仏伝経典としては集大成されたものと考えられているのであるが、ここでは五比丘の初転法輪から耶輸陀とその友人の悟道について順次に詳しく説かれている。五比丘については、

憍陳如・跋提梨迦^{小賢}・婆沙波^{起氣}・摩訶那摩^{大名}・阿奢隄時^{調馬}⁵¹⁾。

とあり、この五比丘教化を説く *Mahāvastu* の梵名は、

Ājñātakaṇḍinya, *Aśvaki(n)*, *Bhadrika(Bhadrika)*, *Vāṣpa*, *Mahānāma*⁵²⁾。

とある。また、仏本行集経とも密接な関係があるとされている *Lalitavistara* には説法会衆として、

Ājñānakaṇḍinya, *Aśvajit*, *Vāṣpa*, *Mahānāman*, *Bhadrika*⁵³⁾。

と列記されているから、無量寿経梵本比丘名の *Bhadrajit* を *Bhadrika* とすれば全く一致し、特に *Lalitavistara* とは順序も同じである。これを漢訳諸本に相応させると、諸先師が指摘された様に最初に列記されるグループが初輪法輪の五比丘であることは間違いないが、確実に相応出来るのは *Aśvajit* (莊)(如)馬勝・(平)馬師、*Mahānāman* (莊)(如)大名・(無)大号・(大)摩訶那弥、

Bhadrika (or Bhadrajit) (如)有賢・(無)仁賢であり、このことより前後が規定されて相応する比丘名は Aśvajit (大)拔智致, Vāṣpa (莊)麼瑟比拏, Bhadrika (莊)跋多婆である。(大)合尸・(平)安祥は推定出来ず、如来会に Vāṣpa の訳語が見られないのは他の比丘が記述されているから省略であろう。(無)正願・正語の梵名は Aśvajit, Vāṣpa と他の比丘名が規定されることによって相応させ得るが、正しい意識語でなく他に典拠を求めるべき比丘名であろう。ここで諸先師の見解を再検討してみると、吉蔵が五比丘を挙げながらも「ここでは憍陳如一人を出す」環興が「大号は離波多、性海が仏本行集経と対比させながら「仁賢を拔智致、深勵・法海が「(五比丘の一人として)十力迦葉⁵⁴⁾」と述べているのは梵名並びに前後の規定から考えて誤りとせねばならない。

次に、耶舎とその四人の友人の列記であるが、仏本行集経では、

耶輸陀上傘・毘摩羅無垢・修婆侯善臂・富蘭那迦満足・伽婆跋帝牛主⁵⁵⁾。

とある。この中、耶輸陀の記述については Mahāvastu に該当部分があり、梵名は Yaśoda となっている⁵⁶⁾。また、Lalitavistara の説法会衆として五比丘に続いて、

Yaśoda, Vimala, Subāhu, Pūrṇa, Gavāṃpati⁵⁷⁾。

と列記されている。従って、その梵名を考える為には Vimala, Subāhu, Gavāṃpati の三人は問題ないが、Yaśodeva については Yaśoda, Pūrṇa-maitrāyaṇīputra については単なる Pūrṇa と云う梵名も考えなければならない。

これらの比丘名を漢訳経典では、

耶奢・無垢・憍梵波提・蘇駄弗・弗那。(雜宝蔵経)⁵⁸⁾

耶舎・満足・善博・離垢・牛王。(五分律)⁵⁹⁾

耶輸伽・無垢・善臂・満願・伽梵婆提。(四分律)⁶⁰⁾

耶舎・富樓那・無垢・驕梵拔提・妙肩。(有部破僧事)⁶¹⁾

等と表わされているが、無量寿経諸本で確実に対比出来るのは Vimala (莊)(無)離垢・(如)無垢・(平)無塵であり、(大)維末抵もこれに相当する音訳語とみてさしつかえない。また Gavāṃpati (莊)(如)憍梵波(鉢)提・(無)牛王・(平)牛伺も容易に対比でき、(大)迦為拔抵も音訳語と思われる。残りの三名であるが、Yaśodeva は(莊)称天、Yaśoda は「夜耶名聞。」(仏五百弟子自説本起経)、「名称比丘。」(有部毘奈耶薬事)等⁶²⁾の用例もあるから(無)名聞が相応しよう。(如)善称もその前後からみて Yaśoda と思われる。それでは Yaśoda と Yaśodeva と、本来、原本ではどちらであったかが問題となるが、莊嚴経訳出の時の原本はすでに Yaśodeva になっていたことは判明出来るにしても、名聞・善称と意識する際には Yaśas だけで可能であり、-da, -deva を訳さなかったと考えることも可能である。しかしながら、-deva (天)は容易に訳が出来る梵語であり、四人の友人とともに出家する耶舎は通常 Yaśa, Yaśoda (Pālī Yasa) とされているから、本来、梵本は Yaśoda であり後に Yaśodeva と変わったと考えるのが妥当であろう。Subāhu は(莊)妙臂は適訳であり、(如)須跋陀羅・(無)善実は前後が規定されるから Subāhu に相応しよう。(平)満願臂は還梵すると Pūrṇa-bāhu となるから、梵本の二人の比丘を一名としたのであろう。(大)須満日は Subāhu の音訳に近いが原本の変化は規定出来ない。最後の Pūrṇa-maitrāyaṇīputra であるが、耶舎の友人と考えられる比丘名は、前述の出典でも判る様に、いずれも、Pūrṇa のみの訳語である。従って、Pūrṇa (莊)布闍拏枳曩・(如)円満・(無)具足・(平)満願(一臂)となり、(大)不遇もその音から考えて相当名であろう。Pūrṇa-maitrāyaṇīputra について云えば、仏本行集経には「富樓那弥多羅尼子満足慈者。」とあって、そこでは彼の出家因縁が説かれ

ている⁶³⁾。単に富楼那或いは弥多羅尼子と記述することもあるが、Mahāvastu では、“Pūrṇa-maitrāyaṇīputra”⁶⁴⁾となっている。無量寿経漢訳諸本でこの比丘名をみると、後の方に(莊)弥多羅尼子・(如)滿慈子・(無)滿願子・(大)邪提文陀弗・(平)盈弁子と記述され、平等覚経を除いて他の訳語は用例も見出される⁶⁵⁾。また、Lalitavistara の説法会衆には、

Cunda, Pūrṇamaitrāyaṇīputra, Aniruddha⁶⁶⁾。

と列記されているが、この順序は漢訳諸本の配列と全く一致している。これらのことより考えると、明らかに梵本の第九番目の比丘名は本来 Pūrṇa であり、Pūrṇamaitrāyaṇīputra は Mahācunda と Aniruddha の間にあったに相違ない。それではその原型と現存梵本との違いが何故に行なわれたかと云うことになるが、諸先師が指摘する様にその記述順序が仏本行集経と深い係わりがあるとすれば、仏本行集経の記述が、

第三十七轉妙法輪品（五比丘）、第三十八耶輸陀因縁品（耶舎）、第三十九耶輸陀宿縁品（耶舎の友人）、第四十富楼那出家品、……、第四十四迦葉三兄弟品⁶⁷⁾。

と続いていることより、耶舎の友人の Pūrṇa と十大弟子の一人である Pūrṇa-maitrāyaṇīputra とを混同して記述し、そのまま Mahācunda の次に続くべき Pūrṇa-maitrāyaṇīputra を前に出したので削ったと考えられる。この五人の比丘に対する諸見解には誤りは無いようである。

次の三迦葉については、足利本の Bhadrakāśyapa が荻原本 Gayākāśyapa と異なった名称であるが、漢訳諸本よりみると、Gayākāśyapa が本来の形である。Uruvilvākāśyapa は(莊)(如)(無)優楼頻𧄢 [=螺] 迦葉と音訳され、(大)憂為迦葉も「優為迦葉」(普曜経・仏五百弟子自説本起経等)⁶⁸⁾と同じ様に略された音訳であろう。Nadīkāśyapa は(莊)(如)(無)那提迦葉、Gayākāśyapa は(如)(無)伽耶迦葉と相応している。従って、Bhadrakāśyapa の訳語は無く、足利本のこの比丘名は後に代って表われたことになる。莊嚴経には Gayākāśyapa に当る訳語はみられないが、その原本になかったとは考えられないから訳出者の省略であろう。如来会・無量寿経の那提・伽耶迦葉の順序は逆であるが、Mahāvastu, Lalitavistara, 仏本行経の梵漢經典とも Nadīkāśyapa (那提迦葉)、Gayākāśyapa (伽耶迦葉) となっている⁶⁹⁾。平等覚経では上時迦葉・治恒迦葉・金杵坦迦葉と意識?され、その前後の比丘名より考えれば梵本の三迦葉に相応すると思われる上時迦葉は Uruvilvākāśyapa であろうが⁷⁰⁾、氏聚迦葉と云う名前もあり、明確な規定は出来ない。大阿経の那履迦葉・那翼迦葉は弥勒菩薩所問本願経の「優為迦葉・那翼迦葉・迦翼迦葉」の記述から考えれば、那翼迦葉は Nadīkāśyapa に当る。梵本 Kumārakāśyapa は漢訳諸本のいずれにもみられないから附加されたと考えて良いであろう。

無量寿経では、四聖徒として次に列記される摩訶迦葉・舎利弗・大目犍連・劫賓那であるが、ほぼ、完全に諸本との対比は可能である。特に、Śāriputra 舎利弗 (or 舎利子)、Mahāmaudgalyāyana 大目犍連は智慧第一、神通第一の仏弟子として出典は非常に多く、その検討は本稿の趣旨ではないので触れないが、比丘衆名の中で検討の必要もなく完全に一致するのはこの二人だけである。Mahākāśyapa 摩訶迦葉については莊嚴経のみ欠いているが省略とみてさしつかえはない。梵本・如来会・無量寿経と大阿経・平等覚経とは、その記述順序が舎利弗・大目犍連をはさんで丁度逆に位置している。Lalitavistara では、

Gayākāśyapa, Śāriputra, Mahāmaudgalyāyana, Mahākāśyapa, Mahākātyāyana⁷¹⁾。

と大阿経・平等覚経の列記と同じであり、仏本行集経では、

第四十七大迦葉因縁品、……、第四十九舎利弗目連因縁品⁷²⁾。

と梵本・如来会・無量寿経と同じ配列である。従って、その原本の変化を考えると、大阿経・平等覚経が訳されたときに用いられた原本は、Lalitavistara の記述と同じ様に Śāriputra, Mahā-maudgalyāyana, Mahākāśyapa であり、それが仏伝經典の伝道記述の変化とともに⁷³⁾ 無量寿経梵本もその影響を受けて、Mahākāśyapa, Śāriputra, Mahā-maudgalyāyana と変ってきたと考えてよいであろう。無量寿経では次に劫賓那を挙げ四聖徒と解釈されているが、漢訳諸本では摩訶迦旃延が挙げられている。彼は梵名 Mahākātyāyana のことであり、Lalitavistara にも同じ順序で挙げられているから、本来の原本にはこの名称があったに相違なく、現存梵本になって欠けたと云えよう。仏本行集経には第四十一那羅陀出家品に「那羅陀の姓として迦旃延⁷⁴⁾」を記述するだけであり、無量寿経諸本の比丘衆名と仏本行集経記述内容との関連性もこの辺りで薄れてきている。次に荻原本で挙げられている Mahākauṣṭhilya は(莊)摩訶俱絺羅であり、(大)摩訶拘私は略された音訳語として近い⁷⁵⁾。足利本にはこの梵名が無くそれに代るべき比丘名も挙げられていないから、後に欠けたのであろう。また、如来会にも此の比丘名は欠けている。無量寿経には Mahākātyāyana, Mahākauṣṭhilya の二人の位置的に相応する意識語として大住・大浄志の名が見えるが他に典拠を求めるべき名前であり、梵名からは規定出来ない。劫賓那は Mahākapphina のことであり、莊嚴経・如来会と一致し、(大)摩訶揭質も音訳語と考えてよいであろう。ここで Mahākātyāyana, Mahākauṣṭhilya, Mahākapphina の三比丘名の梵本での推移を漢訳諸本から考えてみると次の通りであったと思われる。

足利本	荻原本	原本	莊嚴経	如来会
Mahāmaudgalyāyana	Mahāmaudgalyāyana	Mahāmaudgalyāyana	大目乾連	大目捷連
欠	-	欠	-Mahākātyāyana	—摩訶迦旃延—摩訶迦旃延
欠	-Mahākauṣṭhilya	-Mahākauṣṭhilya	—摩訶俱絺羅—	欠
Mahākapphina	—Mahākaphila	—Mahākaphila	—劫賓那—	—摩訶劫賓那—
無量寿経	大阿経	平等覚経		
—大目捷連—	—摩訶目捷連—	—大目捷連—		
	摩訶迦葉	—大迦葉—		
—大住?	—摩訶迦旃延—	—大迦旃延—		
—大浄志?	—摩訶拘私—	—多陁?		
—劫賓那—	—摩訶揭質—	—大賈師?		

さて、諸註解をみると環興の「大住は迦旃延」とする説を多くは踏襲しているが、深励・法海は「俱絺羅」とする。此の両説は現在の註釈書でもみられ⁷⁶⁾、梵名からは規定出来ない。

Mahācunda 以下の比丘名については、漢訳經典には仏本行集経の様に依拠する經典はみられないが、梵文經典では対照表にも挙げ、先にしばしば取り上げた Lalitavistara の説法会衆の列記が非常に類似しているので、その次第を挙げてみよう。そこには、

Cunda, Pūrṇa-maitrāyaṇīputra, Aniruddha, Nandika, Kamphila, Subhūti, Revata, Khadiravanika, Amogharāja, Mahāpāraṇika, Vakkula, Nanda, Rāhula, Svāgatā, Ānanda⁷⁷⁾

とあり、この記述順序は無量寿経梵本とは Khadiravanida 以降が異なるが、参考として漢訳諸本の比丘名と可能な限り対比してみる。

先ず、Mahācunda は(莊)摩訶瞿那・(如)摩訶注那・(無)摩訶周那に明らかに一致する⁷⁸⁾。(大)摩訶梵提・(平)大瘦短はその前後が規定されるから、Mahācunda の音訳・意識語と思われる

る。次に続くべき梵名は耶舎とその友人の五比丘の箇所述べた様に、漢訳諸本からみて *Lalitavistara* と同様に本来は *Pūrṇamaitrāyaṇīputra* が原本にはあったに相違なく、(莊)弥多羅尼子・(如)満慈子・(無)満願子・(大)邪提文陀弗・(平)盈弁子に相応する梵名である。*Aniruddha* は(莊)阿那律・(如)阿尼楼駄・(無)離障・(大)阿難律と平等覚経を除いて明らかに規定出来る。次の *Rādha* は荻原本には無く、漢訳諸本にも認められないから足利本のみ後に附加された比丘名であろう。*Nandika*, *Kimpila* は *Aniruddha* と一緒に經典では述べられる比丘であるが⁷⁹⁾、(莊)喜、緊鼻哩拏・(大)難提、𩱖脾抵と莊嚴經・大阿経では阿那(難)律の次に挙げられている。如来会では阿尼楼駄の次は離波多 (*Revata*) であるから欠けており、無量寿経では堅伏が *Kimpila* の音訳に近いので流灌は *Nandika* に位置的に相応するが、明確な規定は出来ない。平等覚経では位置的に不爭有無、知宿命、了深定と云う意識語が認められるが他に典拠を求めるべき比丘名であろう。*Subhūti* は(莊)須菩提・(大)須楓と容易に推定できるが、如来会には明らかに欠けており、無量寿経にも認められない。平等覚経では善来が位置的に相応している。善来は *Svāgata* が適訳であり、莊嚴經・如来会・無量寿経とも後で挙げる比丘名であるが、諸本の善来は位置的に平等覚経では吉来に当り、離越 (*Revata*) の前に述べる善来はむしろ *Subhūti* を指している様に思われる。以上の *Nandika*, *Kimpila*, *Subhūti* の比丘名は莊嚴經・大阿経には明らかに認められ、如来会・無量寿経・平等覚経では明確な対比は出来ないののであるが、成立史的には最初期の形態とされている大阿経に認められることは、梵本の原型に無かったとは云えないであろう。如来会については、記述される比丘名のすべてが、ほぼ梵名に一致出来るから省略と考えて良い。次の *Revata* は(莊)哩嚩帝・(如)離波多・(大)蠶越・(平)離越と無量寿経を除いていずれも音訳語として認められる。従って、無量寿経のみ欠けていることは考えられず、流灌が当てられることもあるが⁸⁰⁾ 規定は出来ない。*Khadiravanika* は莊嚴經の佉禰囉嚩囉柁囊がその前後の名称から考えて相応する音訳語と思われるが、通常は舍利弗の弟で *Revata-Khadiravanika* と用いられている様であり⁸¹⁾、他の諸本には挙げられていない。引き続いて梵本では“*Vakkula, Svāgata, ……*”と挙げられているが、*Lalitavistara* では“*Amogharāja, Mahāpāraṇika, ……*”と順序が違っている。これを漢訳諸本でみると(莊)佉禰囉嚩囉柁囊、摩訶囉唎。(如)離波多、上首王。(無)流灌、堅伏、面王。(大)蠶越、摩訶囉唎。(平)離越、癡王と梵本の *Vakkula* ではなく、*Lalitavistara* の *Amogharāja* に相応する。従って、漢訳諸本の列記順序は現存 *Sukhāvataṅgyūha* のそれとではなく、*Lalitavistara* の説法会衆の順序と一致することになる。以下 *Lalitavistara* に沿って対比を考えて行くと、*Amogharāja* については漢訳諸本よりみれば *Mogharāja* と考えられ⁸²⁾ (莊)摩訶囉唎・(大)摩訶囉唎は音訳語である。無量寿経の面王は還梵すると *Mukha-rāja* となり、增一阿含経に「著₂幣₃患衣₄ 無₂所₃=差₄耻₅」⁸³⁾ と説かれる粗衣第一の比丘を指すが、ここでは *Mogha* を誤って *Mukha* と解したとみるのが妥当であり、平等覚経では癡 *Mogha*- 王 *rāja* と意識したのであろう。如来会は上首 *Amogha*- 王 *rāja* と梵本通りの意識語と思われる。ここで漢訳諸本からはその原語として *Amogharāja*, *Mogharāja* の二通りが考えられ、如来会を除いて他の四本はいずれも *Mogharāja* が考えられる訳語ではあるが、梵本・*Lalitavistara* で判断する限り、むしろ漢訳者が *cāmogharāja* とある原文の *ca-amogharāja* と分けるべきを *ca-mogharāja* と分けて解したとみる方が良い様に思われる。次の *Mahāpāraṇika* (*Sukh. Pārāyaṇika*) は(莊)波囉野柁囊・(大)摩訶波羅延が音訳語であり、(如)住彼岸・(無)異乗は意識語であろう。平等覚経では前後の規定から氏戒聚が相応するがその意識意図は不明である。*Vakkula* は(莊)嚩拘隸囊・(如)摩俱羅・(大)波鳩蠶が音訳語として認められ、*Vakkula* が *Dvākula* から由来される名前であるなら⁸⁴⁾ (無)仁性?(平)類親は位置的にもこの意識語と云えよう。無量寿経梵本にみられる *Pan-*

tha, Cūlapantha の兄弟比丘は漢訳諸本にみられず、Lalitavistara にも欠けているから後に附加された比丘名と考えて良いであろう。Nanda は(如)難陀・(無)喜樂・(大)難持が相応し、莊嚴經の阿難陀は語から云えば Ānanda であるが列記順序からみれば Nanda に対比すべき位置にある。Rāhula は(莊)(如)羅候羅・(無)羅云・(大)滿楓蠶に当る。平等覺經では Nanda, Rāhula に相応する比丘名として氏梵經、多欲、王宮生、氏黒山、經刹利の比丘名があるが、そのいずれであるか、またこれらが何に由来する意識語であるか判断できない。Svāgata は(莊)(如)(無)善來が適訳であり、(大)蔡掲は仏五百弟子自説本起經に「貨竭・茶竭・蔡竭・善來」⁸⁵⁾と認められる様に音訳語である。平等覺經では前に述べた様に善來とあるのは Svāgata の訳語であっても位置的には吉來の方が正しい相応と思われる。最後に述べられる Ānanda は(如)阿難陀・(無)阿難とあり、平等覺經の博聞は多聞第一の阿難と云われることから考えれば意識語であり、いずれも最後に挙げられている。大阿經の厲越は最後に述べられる比丘名と云う点では Ānanda に相応する音訳語であろうが音は一致しない。莊嚴經では最後から三番目に阿難陀と挙げられているが位置的には Nanda に相応するから、Nanda, Ānanda を混同したのであろう。

ここで大住・大淨志を含めた諸先師の註解をみると、平等覺經の比丘名は規定出来ないのであるが、環輿では「滿願子・離障・善來」の対照は当を得ており、他は誤りが多い。性海は「周那・滿願子・離障・異乘」が正しい。峻諦の「未だ見説を得ず」とするのは穏当な態度であり、白弁・深勵・法海の環輿の所説を批判しつつ述べる見解には殆んど誤りは無い様である。

Mahācunda 以下の比丘名について、以上の検討で云えることは、漢訳諸本の列記次第は現存梵本 Sukhāvātīvyūha のそれとでは無く、Lalitavistara の説法會衆の比丘名と完全に一致しており個々の經典については莊嚴經と大阿經が音訳語を用いてすべて梵名と対比でき、如来會の比丘名は欠けた名前が多いが、挙げられている比丘名は有光を除いて確實に対比は可能である。無量壽經については三、四対照困難な比丘名があり、順序も多少乱れている。平等覺經については全く対照の出来ない意識比丘名が多く、他に典拠を求めて研究されるべきものと思われる。

[6]

以上の漢訳經典にみられる衆成就の形態、諸先師の解釈、梵本比丘名からの対照から、結論として次の様に云えると思われる。先ず、全体的特徴としては無量壽經諸本の比丘名列記は仏傳經典と密接な関係があり、特に Lalitavistara とは Sukhāvātīvyūha 以上に漢訳諸本は一致する。具体的には、Pūrṇa と Pūrṇa-maitrāyaṇīputra, Mahākātyāyana の記述、また Revata, Khadīravanika 以下の Amogharāja, Mahāpāraṇika, ……、Ānanda と続く記述順序は漢訳諸本とのそれに合致している。また、仏傳經典としては比較的後期のものと看做されている仏本行集經の伝道順序と前半部の比丘名は非常に類似しており、諸先師も指摘されている様に出家次第即ち釈尊の仏弟子伝道の順序に沿って挙げられていることが判明する。先ず、初轉法輪の五比丘、耶舎と彼の四人の友人が挙げられているのであるが、大阿經・平等覺經の訳語は不明瞭なものがあり無量壽經・如来會は梵本と順序が一致しない。莊嚴經は完全に合致する。三迦葉、四聖徒(?)については、初期經典とされる大阿經・平等覺經と後期經典とされる無量壽經・如来會・莊嚴經とは摩訶迦葉の順序に違いがあり、また三迦葉の訳語の相違から考えても次第に移行して整備されてきたことが判明する。それ以下の比丘名については漢訳諸本は Lalitavistara の記述順序で述べられ、莊嚴經・大阿經—如来會—無量壽經—平等覺經の順にその対照は困難になっている。個々の經典について云えば、現存 Sukhāvātīvyūha では新しく附加された比丘名も多く Lalitavistara を依り所として考えれば、漢訳諸本成立当時の原本からの変化も、或る程度予想出来る。即ち、Pūrṇa-maitrāyaṇīputra の位置、Mahākātyāyana の欠除、Bhadrakāśyapa, Kumārakāśyapa,

Rādha, Pantha, Cūlapantha の附加等は漢訳諸本成立当時の移行を明らかに示している。この Sukhāvātīvyuha と最も近い比丘名を出すのは莊嚴経であり、伽耶迦葉・摩訶迦葉の明らかに省略と思われる比丘名を含めて、すべてが容易に対応出来る。如来会について云えば、Vāṣpa, Mahākauṣṭhilya, Nandika, Kimpila, Subhūti, Khadiravanika と諸本でも対応困難な比丘名は欠けているが、記述される訳語はほぼ梵本との対照は可能である。無量寿経は、古来より多くの註解により検討されているが、なお、解釈がつかない意識比丘名が、正願・正語・大住・大淨志・流灌・堅伏等と多くあり、梵本並びに漢訳諸本との対応から Aśvajit, Vāṣpa, Mahākātyāyana, Mahākauṣṭhilya, Nandika, Kimpila ではなかろうかと予想出来ても梵名からの意識意図は曖昧である。従って梵本との対応も莊嚴経・如来会に比して困難である。大阿経について云えば、すべて音訳語が用いられ、最初期の形態とされながらも後半部の比丘名が梵本とは殆んど一致していることは注目すべき特徴である。このことは後の発展した形態とされる平等覚経・無量寿経等の原本も現存梵本とほぼ同じ様な梵名が挙げられていたことを示しており、平等覚経・無量寿経に多くみられる梵名からは判断出来ない意識比丘名も、全く別な原語があったのでは無く、現存梵本の梵名から判断されるべき意識語であることを指摘している。大阿経の比丘名がすべて音訳語で表わされていることは、本文で挙げられる仏名・菩薩名でも同様であるが、そこでの諸本との対応は非常に難しい。後日、大阿経の仏・菩薩・比丘名について私見を述べる予定である。平等覚経については全く独特な表現であり、説法会衆として他訳に見られない長者・信女等を挙げる記述から考えても、他に根拠を求めて解明するべきものと思われる。

現存梵本から漢訳諸本の相違を考える試みは或る程度可能であっても、無量寿経の原語はガンダーラ語に近いと云う説があり¹⁾、また、訳出者自身の意図も働いているわけで完全な一致は極めて困難である。大阿経・平等覚経・無量寿経の対比困難な意識比丘名については別な視点から再検討する予定であり、他の機会に述べようと思う。

- 1) 坪井俊映教授『浄土三部経概説』p. 66.
- 2) 大正12・265c ※蚕=螺[㊦], [闕]-[㊦]流布本, 果=異[㊦]流布本, 喜=嘉[㊦]流布本.
- 3) 大正12・279b ※讚=贊[㊦], 杵=朽[㊦]杆[㊦], 坦=埋[㊦], 了=子[㊦], 告=吉[㊦], 経利利=多欲[㊦].
- 4) 大正12・300a ※合=含[㊦], 迺=乃[㊦], =蚕螺[㊦], 持=侍[㊦].
- 5) 大正11・91c ※王=正[㊦].
- 6) 大正12・318a ※彌=弥[㊦].
- 7) 菩薩名については梵蔵本では Maitreya・Byams-pa (弥勒) だけであり、梵本からの無量寿経・如来会の原語は推定出来ない。阿経の菩薩は次の通りであり、ほぼ相応される。
(無) 普賢・妙徳・慈氏・賢護・善思議・信慧・空無・神通華・光英・慧上・智幢・寂根・
(如) 普賢・文殊師利・弥勒・賢護・善思惟・慧升才・觀無住・善華神通・光幢・智上・寂根・
願慧・香象・宝英・中住・制行・解脱。
慧願・香象・宝幢。
- 8) 大正37・132c. 尚、この見解は「妙法蓮華経玄賛 窺甚撰」(大正34・669c-670a) に依拠したものであることはすでに指摘されている。
- 9) 現行の大方便仏報恩経 失訳(大正3・124a)には「摩訶迦葉・須菩提・憍陳如・離越多訶多・富樓那・弥多羅尼子・畢陵伽婆蹉・舍利弗・摩訶迦旃延・阿難・羅睺羅。」とあり、出家次第とはなっていない。ここで云う報恩経とはすでに闕本経となっている支婁迦讖訳の同名経〔歴代三宝紀(大正49・53a), 大唐内典録(大正55・223c), 大周刊定衆経目録(大正55・387a), 開元録(大正55・479a)等〕を指していると思われる。
- 10) 大正9・1c. 尚、異本正法華経 竺法護訳(大正9・63a), 添品妙法蓮華経 闍那崛多共笈多訳(大正9・135a)も訳語は異なるものもあるが、全く同一の比丘名を記述する。梵本“Saddharmapuṅḍarīka, ed. by H. Kern and B. Nanjio, St.-Petersbourg 1912, pp. 1-2.”では、Ājñātakauṇḍīya(阿若憍陳如)以外の初転法輪の四人 Aśvajit, Vāṣpa, Mahānāman, Bhadrīka と Bhāradvāja, Upananda が附加されているが、前の四人は漢訳の省略であり、後の二人は梵本の増広と思われる。他の比丘たちの列記は

ほとんど同一である。尚、法華経では説法会衆として比丘名の後に菩薩衆、諸天子、八大竜王、四緊那羅王、四乾闥婆王、四阿脩羅王、四迦楼羅王等の名前を記述するが、衆成就の典型として考えられているものである。

- 11) 大正14・561c-564b. 尚, 異本維摩詰経 支謙訳 (大正14・521c-523c), 維摩詰所説経 鳩摩羅什訳 (大正14・539c-542a) も全く同じである。
- 12) 大正11・3a. 尚, 異本大方広三戒経 曇無讖訳 (大正11・687c) もほぼ同じである。
- 13) 大正12・186c. 尚, 異本大宝積経弥勒菩薩所問会 菩提流志訳 (大正11・628a) では「阿若憍陳如・摩訶迦葉・優楼頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連阿難・羅喉羅。」と相応していない。
- 14) 大正16・403a. 尚, 異本金光明経, 合部金光明経には比丘菩薩名の列記は無い。
- 15) 大正16・468a.
- 16) 大正3・291a.
- 17) 大正12・346c. 尚, 異本称讚浄土仏摂受経 玄奘訳 (大正12・348bc) では「舍利子・摩訶目犍連・摩訶迦葉・阿泥律陀。」とだけである。梵本 *The Smaller Sukhāvati-vyūha* (『梵蔵和英合璧浄土三部経』所収 p. 194) では「Śāriputra, Mahāmaudgalyāyana, Mahākāśyapa, Mahākapphiṇa, Mahākātyāyana, Mahākauṣṭhila, Revata, Śuddhipam̐thaka, Nāṃda, Ānaṃda, Rāhula, Gavāṃpati, Bharadvāja, Kālo-dayin, Vakkula, Aniruddha.」とあり、羅什訳と摩訶劫賓那の位置を除いて一致しているから、玄奘訳は中間を削除したと考えてよいであろう。
- 18) 大正19・224bc. この後に諸菩薩・天王・成就呪仙・神等が続く。尚, 菩提場所説一字頂輪王経 不空訳 (大正19・193b) も同じであるが、諸菩薩は比丘名の前に述べられている。異本五仏頂三昧陀羅尼経にはみられない。
- 19) 大正11・351a.
- 20) 大正11・550b. 尚, 異本阿闍貴王女阿術達菩薩経 竺法護訳 (大正12・84a) も同じ。
- 21) 大正11・556a. 尚, 異本離垢施女経 竺法護訳 (大正12・89c), 得無垢女経 般若流支訳 (大正12・98a) もほぼ同じである。
- 22) 大正11・650b.
- 23) 大正11・678c. 尚, 異本毘那婆問経 般若流支訳 (大正12・223c) もほぼ同じ。
- 24) 大正16・460c. 尚, 異本大方等如来蔵経には、比丘名は記述されていない。
- 25) 大正18・785b.
- 26) 大正19・180a.
- 27) 大正19・286bc.
- 28) 大正19・578b.
- 29) 大正20・34b.
- 30) 大正20・542c.
- 31) 大正20・587c. 尚, 異本善法方便陀羅尼経, 金剛秘密善門陀羅尼呪経, 金剛秘密善門陀羅尼経, 護命法門神呪経 (大正20・580a, 581c, 583a, 584b) には「舍利弗・大目犍連・阿難。」のみである。
- 32) 大正11・340b, 628a, 13・959b, 976c, 14・65c-66a, 492c.
- 33) 行徳次第と考えられる經典として先に取り上げた一字頂輪王経, 異本菩提場所説一字頂輪王経には、
 「迦葉波・大迦葉波, 目犍連・大目犍連, 憍梵鉢提・大憍梵鉢提, 孫陀羅・大孫陀羅」と実在性の薄い比丘名が記されているが、この様な比丘名は行徳次第と考えられる列記に多い。また、大方広菩薩蔵文殊師利根本儀経 天息災訳 (大正20・842a) には、浄光天大牟尼仏所に集会聴法する大声聞として百三十二比丘名が列記されているが、その中には「大迦葉, 伽耶迦葉, 優楼頻螺迦葉, 大目乾連, 舍利子, 須菩提, 憍梵波提, 大迦多演曇, 優波利, 波捺哩迦, 羯賓那, 難陀, 阿難陀, 孫陀羅難陀, 難陀迦, 阿楼駄, 布囉拏, 羅護羅, 得称, 名称, 金頗羅, 童子迦葉, 莎誦多」の名前が見出せる。しかし、ここでは実在の比丘としての意識はすでに失われているから、現実性を持って考えられていた比丘たちから発展した形態と考えられる。
- 34) 諸經典に表われる説法会衆については、更に梵蔵本との比較から検討しなければならないことであるが本稿の本旨ではないので無量寿経説法会衆としての比丘名列記を考える以前の問題として漢訳經典に表われる比丘名列記を概観した次第である。
- 35) 以下に取り上げる諸註解とその記述箇所は次の通りである。殆んどは漢文で書かれているが引用に際しては判り易く改めた。
 慧遠 無量寿経義疏 (大正37・94a)
 吉蔵 無量寿経義疏 (大正37・117c-118b)
 宗興 無量寿経連義述文贊 (大正37・133a-134a)
 性海 無量寿経顯宗疏 (真宗全書 1・18a-43b)
 峻諦 無量寿経会疏 (真宗叢書 3・12a-22b)

- 道穩 無量寿経甄解 (仏教大系 1・204-214)
 白舟 無量寿経集解 (大日本仏教全書53・28b-35a)
 深励 無量寿経講義 (仏教大系 1・192-204)
 法海 大無量寿経庚寅録 (真宗大系 1・84a-91a)
 尚, 外に著名な註釈として, 元暁・了慧・聖聡・義山・観徹・慧雲・円澄等があるが, 比丘名の解釈についてはその以前の註解の依用, 或いは素読として触れられていない。
- 36) 環興の註釈書をはじめ, 諸註解にはしばしば義寂の引用がみられ, それによると異本を参看していることが判明するが, 義寂の書といわれる無量寿経述義記は現存していない。
- 37) 荻原雲来博士「梵和对訳 無量寿経」(『梵蔵和英合璧浄土三部経』昭和六年, 所収)
- 38) Atsuuji Ashikaga: *Sukhāvātīvyūha*, Kyoto (法蔵館), 1965.
- 39) *ibid.* p. 1. l. 20 - p. 2. l. 10. Wogihara 本 p. 6. ll. 2 - 11.
 本文はいずれも具格の形で述べられているが, ここでは語幹を出す。荻原本との差異がみられるものはその都度指摘したが, 後の比較において必要とみられる比丘名は附加した。右に記した語は通常經典に表われるパーリ語である。cf. G. P. Malalasekera: *Dictionary of Pāli Proper Names*, London, 1960 2 vols. 尚, 足利本・荻原本の校訂は辻直四郎博士「*Sukhāvātīvyūha*, édité par A. Ashikaga, Kyoto, 1956」書評(『鈴木学術財団研究年報 2』pp. 83-84)において, この箇所だけなされてある。
 蔵本 *Ḥphags pa ḥod dpag med kyi bkod pa shes bya ba theg pa chen poḥi mdo* (『梵蔵和英合璧浄土三部経』所収 p. 220. l. 12 - p. 222. l. 1.) は梵本と殆んど一致するから必要に応じて述べる。
- 40) 青木正雄氏「無量寿経の研究」(『宗学院論輯, 29号 p. 189)には諸本対照して仏弟子名を列記する(坪井俊映教授『浄土三部経概説』p. 67)とあるが, 披見出来なかった。
- 41) 赤沼智善教授『印度仏教固有名詞辞典』p. 42b-44a, 『望月仏教大辞典』p. 45b.
- 42) 大正 3・811c-812c.
- 43) 『梵蔵和英合璧浄土三部経』所収. p. 220. l. 12.
- 44) あまり表われない訳語であるが竺法護訳出經典にみられる (大正 9・63a, 12・186c).
- 45) 大正 1・471c.
- 46) 大正 2・324c.
- 47) 大正 2・550b, 557a.
- 48) 大正 3・530ab.
- 49) 大正 4・147c-149a.
- 50) 大正12・239a.
- 51) 大正 3・812c. 尚, 漢訳經典の用例は〔2〕出家次第の列記, 参照。
- 52) Émile Senart: *Le Mahāvastu (=MV.)*, Paris, 1882-97. III, p. 328 l. 20 - p. 329 l. 1, p. 337 ll. 4 - 6, p. 338 l. 20 - p. 339 l. 2, *Ājñātakauṇḍinya* の語はほかに p. 333 l. 19, p. 341 l. 3, p. 345 l. 3, p. 347 l. 14 - p. 349 l. 4 (彼の本生を記述) etc.
 尚 “*Aśvaki(n)*, =*Aśvajit*, in MV only: (°*kī*, nom.); ……; °*kisya* (gen.)”(Franklin Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, New Haven, 1953. II. Dictionary p. 81)
- 53) S. Lefmann: *Lalitavistara (=LV.)*, Halle a S., 1902. I, p. 1, ll. 6-9,
 尚, LV. の漢訳とされている方広大莊嚴経 (大正 3・539a) では,
 阿若憍陳如・摩訶迦葉・舍利弗・摩訶目乾連・摩訶迦旃延・富婁弥多羅尼子・摩訶南・阿菴婁駄・劫賓那・跋提羅・優波離・難陀・婆伽陀・阿難・羅睺羅
 とあって, 一致していない。
 また, 古い異訳普曜経をはじめ, 漢訳仏伝經典である太子瑞應本起経・異出菩薩本起経・修行本起経・中本起経・過去現在因果経・衆許摩訶帝経・仏本行集経等には, いずれも説法会衆名の列記は無い。
- 54) 五比丘の一人として「十力迦葉 (*Daśabalakāśyapa*)」を説くのは,
 仏所行讚「憍陳如・十力迦葉・婆洸波・阿濕波誓・跋陀羅」(大正 4・29b)
 中本起経「拘隣・婁陞・跋提・十力迦葉・摩南拘利」(大正 4・147c)
 に見られ, *Mahānāman, Vāṣpa* に対して用いられているが, 本来, 五比丘には含まれないとされている。(『望月仏教大辞典』p. 1273a, p. 2404c, 『印度仏教固有名詞辞典』pp. 148-149.)
- 55) 大正 3・819b.
- 56) MV., III, p. 401, l. 19 - p. 415, l. 5,
- 57) LV., I. p. 1, ll. 8 - 10.
- 58) 大正 4・469c.
- 59) 大正22・105c.
- 60) 大正22・790c.

- 61) 大正24・129c.
 62) 大正4・193b, 大正24・81c, 83b, 大正20・842b.
 63) 大正3・824a-825a.
 64) MV., III, pp. 377-381.
 65) 弥多羅尼子は雑阿含(大正2・66a), 阿羅漢具德經(大正2・831a), 仏本行集經。満慈子の中阿含(大正1・429cf.), 給孤長者女得度因緣經(大正2・849a)。満願子は増一阿含(大正2・557c, 733c-735b, 795b)。正法華經(大正9・63a), 娑提文陀弗は生經(大正3・81a), 賢愚經(大正4・396a), 並に註(10)~(32)の經典。
 66) LV. p. 1, ll. 15-16.
 67) 大正3・807c-874a.
 68) 大正3・530c, 大正4・195a, 大正12・186c.
 69) MV. III, p. 102, l. 12, p. 430, ll. 12-13, 18-19, p. 432, ll. 7-8, p. 434, l. 7, etc., LV. p. 1, ll. 10-11, 仏本行集經(大正3・840cf.)。しかし諸經典をみると那提・伽耶迦葉の前後は必ずしも定まってい
 ない。
 70) 正法華經(大正9・63a)には上時・象・江迦葉とあるから, 上時迦葉は Uruvilvakaśyapa を示す。
 71) LV. p. 1, l. 11-13.
 72) 大正3・861c-879a.
 73) 仏傳經典の集大成とされている仏本行集經には LV. のそのままの引用がみられ, LV. が仏本行集以前の成立であることは, すでに指摘されている。(常盤大定博士「仏本行集經解題」『国訳一切經本縁部三』所収 p. 13.)。諸經典の列記には, どちらの場合もあり統一はとれていない。
 74) 大正3・825a.
 75) 義足經「大句私」。(大正4・179a), 正法華經「拘絺」(大正9・63a)。
 76) 柏原祐義師『浄土三部經講義』(p. 83), 岩波文庫本中村元博士等訳註『浄土三部經』上(p. 254)では大住を Mahākauṣṭhilya の義釈とし, 坪井俊映教授『浄土三部經概説』(p. 64)では, Mahākātyāyana と説明する。
 77) LV. I. p. 1, l. 15-p. 2, l. 4.
 78) 周那の訳語は中阿含(大正1・427c, 572c, 573b, 752c etc.), 長阿含(大正1・72c etc) にも見出せる。
 79) 『印度仏教固有名詞辞典』pp. 47b-51a, 307a-308a, 449b-450a.
 80) 岩波文庫本『浄土三部經』上, p. 254.
 81) 『印度仏教固有名詞辞典』pp. 545a-547a.
 82) 同上書 p. 428ab, 岩波文庫本『浄土三部經』上, p. 254では漢訳に対して Mogharāja を梵名とする。
 83) 大正2・558a。尚, 弥勒菩薩所問本願經にもみられる。(大正12・186c)。
 84) 『印度固有名詞辞典』pp. 73b-74a, 岩波文庫本『浄土三部經』上, p. 255.
 85) 大正4・192b-193a.
 [補] グラフ博士は無量寿經の訳語にはガンダーラ語の明らかな形跡を示すとして, 特に, 了本際(知本際)正願・正語をガンダーラ語の意識語, また周那をの音訳語としてそれを証明されるが, すべてに言及しているわけではない。John Brough: Comments on Third-Century Shan-shan and the History of Buddhism, BSOAS, vol. XXVII, part 3, 1965, pp. 608, 610-11. cf. 藤田宏達助教授「インドの浄土思想」『講座東洋思想6』p. 10

〔附〕

无量寿經の仏・菩薩・比丘名の記述は, 本稿で取り上げた説法会衆の外に, 阿弥陀仏が未だ法蔵菩薩であったとき師仏である世自在王仏が出現される迄に現われた過去五十三仏, 阿弥陀仏の光明威神なるが故に別称として挙げられる十二光仏, 他方菩薩の浄土往生の際に説かれる十三仏国等に認められる。

就中, 過去仏名については「无量寿經過去仏名について」『札幌大谷短期大学紀要』(第2号), 十二光仏については「无量寿經十二光仏について」『印度学仏教学研究』(第十五卷第二号)に発表した。この中, 過去仏名については, 当時足利本刊行以前であり, 荻原本の校訂に沿って考えた。しかしながら, 日本印度学仏教学会出席の為の出張中に印刷になり, 校正することなく刊行されてしまったので, 直ちに正誤表を添付したが非常に多くの誤植があり, 足利本が刊行されたことでもあるので, ここで対照表だけでも足利本を底本として, 誤字誤植十八箇所を訂正し, 改めて再作成することにした。尚, 「无量寿經過去仏名について」に於いて参考とした京都大学所蔵写本は, 北海道大学藤田宏達助教授が京都大学の足利惇氏博士の御諒承を得

て写真本で入手されたのを更に見せていただいたものである。

過去仏名対照表

Skt.	莊嚴經	如來會	無量寿經	平等覺經
1 Dīpaṃkara	①然燈	①然燈	①錠光	①定光
2 Pratāpavat	②鉢 薩多波野輸	②苦行	②光遠	②曜光
3 Prabhākara	③発光			
		③月面	③月光	③日月香
4 Candanagandha	④贊那曩 戔 薩護	④旃檀香	④旃檀香	
5 Sumerukalpa	⑤須弥劫	⑤蘇迷盧積	⑤善山王	④安明山
		⑥妙高劫	⑥須弥天冠	
			⑦須弥等曜	
6 Candrānana1)	⑥月面	(③月面)	⑧月色	⑤日月面
			⑨正念	
7 Vimalānana	⑦無垢面	⑦離垢面	⑩離垢	⑥無塵垢
8 Anupalīpta	⑧無著	⑧不染汚	⑪無著	⑦無沾汚
9 Vimalaprabha				
10 Nāgābhīhū	⑨龍主	⑨龍天	⑫龍天	⑧如龍無所不伏
11 Sūryānana2)	⑩日面		⑬夜光	⑨日光
12 Girirājaghoṣa	⑪山響音王	⑩山声王		⑩大音声
13 Sumerukūṭa3)	⑫須弥峯	⑪蘇迷盧積	⑭安明頂	
14 Suvarṇaprabhāsa4)				
(Suvarnagarbha?)	⑬金藏	⑫金藏	⑮金藏	⑫金藏
15 Jyotiṣprabha	⑭火光	⑬照曜光	⑮炎光	⑪宝潔明
		⑭光帝	⑯炎根	⑬焰宝光
	⑮不動地	⑮大地種姓	⑮不動地⑰地種	⑭有拳地
16 Vaiḍūryanīrbhāsa	⑯琉璃光	⑯光明熾盛	⑯琉璃妙華	⑮琉璃光
		琉璃金色	⑰琉璃金色	
17 Brahmaghoṣa				
18 Candrābhīhū	⑰月王	⑰月像	⑳月像	⑯日月光
19 Sūryaghoṣa5)	⑱日音		㉑日音	⑰日音声
20 Muktakusumapratī- mañjītaprabha	⑲散華莊嚴	⑱開敷花莊嚴光	㉒解脫華	⑲光明華
			㉓莊嚴光明	
21 Śrīkūta	㉔吉祥峯			
22 Śāgaravarabuddhi- vikrīḍitābhijñā	㉕持海慧自在通王	⑲妙海勝覺遊戲神通	㉖海覺神通	⑲神通遊持意如海
			㉗水光	⑳嗟歎光
23 Varaprabha	㉘施光	㉘金剛光		㉑具足宝潔
				㉒光開化
24 Mahāgandha- rājanīrbhāsa7)	㉙大香象光	㉙大阿伽陀香光	㉚大香	㉚大香聞
25 Vyapagatakhilamala- pratigha6)	㉚離一切垢	㉚捨離煩惱心	㉚離塵垢	㉚降棄恚嫉
			㉛捨厭意	

- 26 Śūrakūṭa ②⑤勇猛峯 ②④勇猛積 ③②妙項
②⑤勝積 ③③勇立
- 27 Ratnajaha7) ②⑥宝光 ②③宝増長 ③①宝炎
- 28 Mahāguṇadhara-
buddhiprāptābhijñā ②⑦持多德得通 ②⑥持大功德法施神通 ②④功德持慧
- 29 Candrasūryajihmī-
karaṇa ②⑨過日月光 ②⑦映蔽日月光 ③⑤蔽日月光
③⑥日月琉璃光
- 30 Uttaptavaiḍūrya-
nirbhāsa ②⑨最上瑠璃光 ②⑤照曜琉璃光 ③⑦無上琉璃光 ②⑤妙琉璃紫磨金焰
③⑧最上首
- 31 Cittadhārabuddhi-
sāṅkusmitābhyudgata ③⑩慧花用心行出生 ②⑨心覺花 ③⑨菩提華 ②⑥心持道華無能過者
③⑩月光 ④⑩月明
③①日光 ④①日光
- 32 Puṣpāvātīvanarāja-
sāṅkusmitābhijñā ③①大華林通王 ③②花瓔珞色王開敷神通④②華色王
- 33 Puṣpākara ②⑦積衆華
- 34 Udakacandropama ③②一月光 ③③水月光 ④③水月光 ②⑧水月光
- 35 Avidyāndhakāra-
vidhvāṃsanakara ③③破無明黑暗 ④④破無明暗 ④④除癡冥 ②⑧除衆冥
④⑤度蓋行
- 36 Lokendra ④⑤淨信
- 37 Muktaçhatrāpra-
vāḍasad:śa8) ④④真珠珊瑚蓋 ④⑤真珠珊瑚蓋 ④⑥善宿 ③⑩日光蓋
④⑦威神
- 38 Tiṣya ④⑥底沙 ③⑩溫和如來
④⑦勝花
- 39 Dharmamati-
vinanditarāja ④⑤三乘法自在王 ④⑧法慧吼 ④⑨法慧 ③②法意
⑤⑩響音
- 40 Siṃhasāgarakūṭa-
vinanditarāja ④⑩師子海峯自在王 ④⑨有師子吼鵝鴈声 ⑤①師子音 ③③師子威象王步
- 41 Sāgaramerucandra
- 42 Brahmaśvaranāda-
abhinandina ④⑦梵音声自在王 ④⑩梵音竜吼 ⑤②竜音 ③⑤淨音
④⑨世豪
④①世主 ⑤③処世 ③⑥不可勝
- 43 Kusumasaṃbhava
- 44 Prāptasena
- 45 Candrabhānu
- 46 Merukūṭa
- 47 Candraprabha
- 48 Vimalanetra
- 49 Girirājagoṣeśvara
- 50 Kusumaprabha
- 51 Kusumavṛṣṭyābhiprakīrṇa
- 52 Rathacchatra9)
- 53 Padmavīthyupaśobhita10)
- 54 Tagaragandha11)
- 55 Ratnanirbhāsa12)

- 56 Nirmita¹³⁾
 57 Mahāvvyūha
 58 Vyapagatakhiladoṣa
 59 Brahmaghoṣa
 60 Saptaratnābhivṛṣṭa
 61 Mahāguḍadhara
 62 Tamālapatracandanakardama¹⁴⁾
 63 Kusumābhijña
 64 Ajñānavidhvaṃsana
 65 Keśarin
 66 Muktaçchatra
 67 Suvarṇagarbha (莊)-¹⁸⁾, (如)-¹⁹⁾, (無)-¹⁸⁾, (平)-¹⁹⁾金藏
 68 Vaiḍūryagarbha
 69 Mahāketu
 70 Dharmaketu¹⁵⁾
 71 Ratnaśrī
 72 Narendral⁶⁾
 73 Lokendra
 74 Kāruṇika
 75 Lokasundara
 76 Brahmaketu
 77 Dharmamati ((無)-⁴⁹⁾法慧, (平)-⁴⁹⁾法意)
 78 Siṃha
 79 Siṃhamati
 80 Lokeśvararāja ((莊)-世自在王, (如)-世間自在王, (無)-世自在王, (平)-楼夷亘羅)。

※足利本は、Oxford 出版本・京都大学図書館所蔵の写本・西藏語訳・荻原博士の刪修を参照し、脚注においてその相違を指摘されているが、辻博士の書評（本稿註39）に述べられているように荻原本との相違は稀にしか挙げられていないので、それを挙げておく。

- (1) Camdana 刪修¹⁷⁾ Candrānana, (2) Sūryodana 刪修¹⁸⁾ Sūryānana,
 (3) Merukūṭa, (4) -prabha, (5) Tūrya- 刪修¹⁹⁾ Sūrya-, (6) -pratighoṣa 刪修²⁰⁾ -pratigha, (7) Ranañ-
 刪修²¹⁾ Ratna-, (8) -cchatrapravāta- 刪修²²⁾ -pravāḍa- (9) -caṇḍra 刪修²³⁾ -cchatra, (10) -bimby- 刪
 修²⁴⁾ -vīthy-, (11) Candana- 刪修²⁵⁾ Tagara-, (12) Ratnābhībāsa (13) Nimi, (14) Mahātamāla-, (15)
 この仏名の後に Ratnaketu 名あり (16) Narendral と Lokendra が逆。